



「出会いを導く支援をしたい」。旅の案内誌「みちくさ」を刊行するアイロドの代表取締役兼編集長の福永栄子(52)＝宮崎市大工3丁目＝は力強く語る。2007年にアイロドを立ち上げてから「みちくさ」の発行部数は現在10万部。地域の情報を掘り起こすために日々奔走している。

その活動は案内誌発行だけでなくとどまらない。地域コーディネーターである福永は中山間地域の山村体験モーターツアーやガイドブック製作も手掛けている。アイロドの立ち上げメンバーである有田知永さん(32)は福永のことを「有言実行の人」と表現する。「会社を設立した当時から明確な目標を持ち、現在それが形になっている。長いスパンと短期間の集中力を合わせ持った人」。

案内誌編集長 福永栄子(宮崎市) ①

# 福永 栄子さん(宮崎市)

「みちくさ」発刊のきっかけをつくったのは名前も知らない男性だった。福永は2000年、えびの市に滞在していた。当時同市ではJR吉都線の特急が走らなくなり、同線は廃線になるのではという不安が広がっていた。そのうわさを聞いて高原町の高原駅に立ち寄った福永が目にしたのは窓が割れ、ボロボロになり、若者のたまり場となってしまう駅舎。神奈川県で育った福永にとって駅とは人が集まり、活気のある場所。地域の疲弊を実感した。



「みちくさ」の紙面作りに励む福永

参加しだした。その行動は行政までも動かし、同駅にはJRと協力し同町観光協会が入ることになった。小さな草の根運動は大きな実りを結んだ。「この動きを形に残さないと」。ボランティアで掃除をすることはなかなかできることじ

やない。でも地域の人にとつてはそれが当たり前になっている。もつと誇っている。地域にはまだまだ可能性が眠っている。福永はそれを形にしたい。福永は「みちくさ」を南九州の旅の情報誌と位置付け、民間だからこそできる境のない業務展開を行っている。鹿児島や熊本など、地域に入り込んでの取材を基本としている。

当初5人だったメンバーは20人になり、8の冊子から始まった「みちくさ」は56の情報誌へと成長した。徹底的な現場主義で、地域の人々との出合いを生み出し続ける福永だが、出身は福岡県で神奈川県育ち。縁もゆかりもない宮崎と福永を結び付けたもの。それは海外滞在中に経験した医療事故だった。

「県境にとらわれない紙面を作りたい」福永は「みちくさ」を南九州の旅の情報誌と位置付け、民間だからこそできる境のない業務展開を行っている。鹿児島や熊本など、地域に入り込んでの取材を基本としている。

当時は26日付県版に掲載

(敬称略)

# 情報掘り起こし奔走

を施す。有田知永(32)は福永のことを「有言実行の人」と表現する。「会社を設立した当時から明確な目標を持ち、現在それが形になっている。長いスパンと短期間の集中力を合わせ持った人」。